

構造化理論から知識の社会学へ(4)

倉田 良樹

1. 本論文の課題
2. 二重性
3. 行為主体性
- 3.1 定義
- 3.2 行為の階層性について
- 3.3 行為における条件と帰結の循環
- 3.4 Giddens の行為理論：ここまでの議論の要約
- 3.5 Archer による批判
- 3.6 Stones の強い構造化理論
- 3.7 構造化理論から知識の社会学へ
4. 構造
- 4.1 構造という概念を論ずることの困難
- 4.2 Giddens の概念規定
- 4.3 Porpora に学ぶ
- 4.3.1 Porpora の「社会構造の四つの概念」
- 4.3.2 規則概念への批判
- 4.3.3 資源概念への批判
- 4.3.4 Porpora の構造化理論
- 4.4 Sewell に学ぶ
- 4.4.1 Sewell の「構造の理論：二重性と主体性と変容」
- 4.4.2 規則概念に関する考察
- 4.4.3 資源概念に関する考察
- 4.4.4 スキーマと資源の再統合
- (以上、前回まで)
- 4.5 構造化理論・構築主義・实在論：構造に関する三つの立場
- 4.5.1 構築主義的な構造概念による構造化理論の再解釈：Sewell
- 4.5.2 实在主義的な構造概念による構造化理論の批判：Porpora
- 4.5.3 創発主義的な構造概念による論争の決着：Elder-Vass
5. 各章の要約と結論
- (完)

4.5 構造化理論・構築主義・実在主義：構造に関する三つの立場

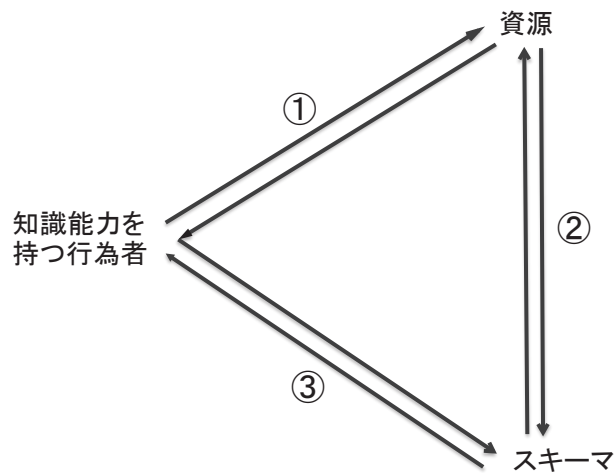
Giddens の構造化理論において、構造という概念には、「規則と資源」という直示的な定義が与えられている (4.2節)。本論文の第4章では、これまで4.3節で Porpora の論文⁽¹⁾、4.4節で Sewell の論文⁽²⁾を取り上げ、彼らが「規則と資源としての構造」という Giddens の直示的な定義をどのように批判し、どのように書き換えようとしたのかを追跡してきた。4.2節で記したように、Giddens の構造に関する概念規定は、この直示的定義に、存在論的定義と因果論的定義を加えて、三つの水準で重層的に行われている。そこで筆者は4.4節を終えるにあたって、存在論的定義と因果論的な定義についても、それぞれ別の節を設けて、独立した視角から検討する方針を示していた。だが今回、本論文を再開するにあたっては、この方針を変更し、4.3節と4.4節で着手した、直示的な定義に関する検討をさらに深めることによって、構造の存在論的な意義と因果論的な意義についての論争点を浮かび上がらせていくことにした。

さて、4.3節と4.4節において、規則と資源としての構造という Giddens の概念規定を批判する二つの文献をレビューすることで、筆者が明らかにしたかったことは、以下の二点である。第一には、Porpora と Sewell は、どちらも、規則ないしスキーマの再生産が、行為主体に帰属される知識能力 knowledgeability に支えられている、という構造化理論の命題そのものについては、異を唱えることなく、それを前提として受容している、ということである。第二には、それにもかかわらず、両者は、行為者の知識能力との関係で、規則と資源をどのように位置づけるのか、という概念規定の中心点において、それぞれ別様な方向に構造化理論を読み替えようとしている、ということである。この両者の相違点については、さらに周到な説明がなされなければならないが、さしあたり、「構築主義的な構造概念によって構造化理論を再解釈する方向」(Sewell)と「実在主義的な構造概念によって構造化理論を批判していく方向」(Porpora)というふうに区分けしておくことにしよう。本論文ではさらに、こうした二つの方向のいずれとも妥協することなく、「強い構造化理論」によって、あくまでも Giddens の構造化理論を擁護しようとする方向 (Stones) も生き続けていることが明らかにされていた。構造に関する論争は、三つの立場が鼎立するという状態に行き着いたのだった。以下の論考においては、まず、構築主義的な構造概念が、構造化理論をどのように再解釈しようとしたのか (4.5.1)、そして実在主義的な構造概念が、構造化理論をどのようにして否定しようとしたのか (4.5.2)、についてさらに検討する。二つの項で、順を追って説明していこう。

4.5.1 構築主義的な構造概念による構造化理論の再解釈：Sewell

Sewell は構造化理論にどのような再解釈を施したのか。この点を確認するために、4.4.4項の結論部分で示した図8「行為主体性、資源、スキーマによる二重性のトライアングル」に若干の追記を行い、図9として再掲しよう。ここに示されているのは、知識能力と資源とスキーマという3つの頂点を持ち、二方向（時計回りと反時計回り）に回るトライアングル図式である。一見しても明らかなように、Sewell による構造化理論の再解釈は、社会構築主義的な議論に特有の、循環的な図式となっている。そして、社会の成り立ちを説明する、この循環的な図式の全体を支えているのが、社会にストックされた知識が相互行為を導く、という命題であるように思われる。

図9 知識能力、スキーマ、資源による二重性のトライアングル⁽³⁾
(Sewell による構造化理論の読み替え)



構築主義とはどのような社会理論であるのか。千田（2001）は、構築主義の主要な指標として、（１）社会を知識の観点から検討しようとする志向性、（２）それらの知識が人々の相互作用によって絶えず構築され続けていることへの自覚、（３）知識が狭義・広義の制度と結びついているという認識、という三点をあげている⁽⁴⁾。Sewell のトライアングル図式をこの三つの指標と対応させて眺めれば、（１）の指標に関しては、社会にストックされた知識が相互行為を導く、という上記命題がここにあてはまること、（２）の指標に関しては、トライアングルの三つの頂点が、それぞれを相互に強化・再生産し続けるという、継続的な関係が示唆されていること、（３）の指標に関しては、トライアングルの具体的な事例として、軍事制度、カトリック教会、王制、ポトラッチ、賃労働制度、中世の土地所有制度という六つの制度が示されていること、を指摘することができる⁽⁵⁾。Sewell の解釈する構造化理論は、間違いなく構築主義の主要指標を満たしているといえるだろう。

だが、この循環する図式は、社会を理解するうえで、一体何を意味しているのだろうか。そのことは必ずしも自明ではない。一つの可能な解釈は、この図式が、時間的な先後関係に沿った原因と結果の関係を意味しているということである。歴史学者である Sewell が、歴史的因果連鎖の解明図式という観点から、構造化理論に関心を寄せていることは、疑う余地がないだろう。それを前提にすれば、例えば行為主体性を出発点におき、この図式を③→②→①という順で、内回り（反時計回り）に辿っていくことで、行為主体の知識能力が有意味な一定のスキーマを創出し（③）、そのスキーマに基づいて自然的資源を活用することで（②）、行為主体の目的に見合った社会的な力を獲得することができる（①）、といった能動的な因果連鎖のサイクルを描き出すことができる。Sewell が引用している事例に即していえば、Kwakiutl 部族の優れた知識能力を持つ酋長は、ハドソン湾で捕獲された大量の収穫物を、気前よく贈与することで、自らの権力と威信を強化することができるのである⁽⁶⁾。

だが他方、今度はスキーマを出発点におき、この図式を③→①→②という順で、外回り（時計回り）に辿っていくことで、すでに社会に定着しているスキーマによって行為主体の知識能力に

歪みが生じ (③)、歪んだ認知枠組みが資源の生産と配分にさいして社会的に不均等なアクセスをもたらす (①)、不均等な資源配分は、それを正当化するためのイデオロギーを編み出す基盤を提供する (②)、といった抑圧的な因果連鎖のサイクルを描き出すことができる。Sewell が引用している事例に即していえば、土地所有に関する中世の慣習法に根ざした抑圧的な認知枠組みは、資源の生産と分配に関わる行為者間の不均等な関係を固定化させ、そうした物的不均等は、領主が農民を支配する権力を正当化するイデオロギーを作り出す基盤となるのである⁽⁷⁾。

このように、Sewell によって再解釈を施された構造化理論は、循環的であるだけでなく、また両義的⁽⁸⁾でもある、という構築主義的な社会理論に固有の二つの性質を伴うものであった。構造化理論によって「社会理論の中心問題」に決着をつけようとしていた、野心に満ちた前期の Giddens からすれば、構造化理論を構築主義的な社会理論の一つのヴァリエーションとして解釈するような議論は、本意に反することかもしれない。だがここで一度、本論文の連載を開始するにあたって、筆者が構造化理論のエッセンスを示すために紹介した、Giddens による Marx からの引用である「人間は自らの歴史を作るが、自身で作った状況の下でそうするのではない」‘men make their history, but not under circumstances of their own making’ という『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の警句⁽⁹⁾に立ち戻ってみよう⁽¹⁰⁾。先に事例として示したサイクルを③→②→①と辿る優れた酋長については、先の Marx の警句から but not を取り除いて「人間は自分自身が作った状況の下で自らの歴史を作る」‘men make their history under circumstances of their own making’ という文で表現できる、構造の強化・再生産サイクルを「動かしている」人々として理解することができる。この場合、構造は行為主体に可能性を付与 enable しているのである。他方、先に示したもう一つの事例、すなわちサイクルを③→①→②と辿る中世の隷属農民については、文字通り、「人間は自らの歴史を作るが、自身で作った状況の下でそうするのではない」‘men make their history, but not under circumstances of their own making’ という文で表現できる、構造の強化・再生産サイクルによって「動かされている」人々として理解することができる。この場合、構造は行為者を制約 constrain しているのである。

ここで確認しておきたいことは、こうした構築主義的な解釈は、必ずしも構造化理論に対する曲解とはいえない、ということである。例えば、構造化理論の主著の一つである『社会理論の中心問題』において、Giddens 自身が「構造と行為主体性は相互に依存し合う mutual dependency」、「構造は行為者に可能性を付与するものでもあり、行為者を制約するものでもある both enabling and constraining」という二つの命題（前者を循環命題、後者を両義性命題と名付けることも可能だろう）を明確に打ち出している⁽¹¹⁾。このことを確認するなら、Sewell による社会構築主義的な構造化理論の理解は、Giddens 解釈の方向として、決して不当なものとはいえない。Sewell の試みは、構造化理論を構築主義的に解釈することで、それが Schuz に端を発して、Berger=Luckmann (1967) が継承した「現象学的な知識社会学」をさらに発展させている点において、積極的な意義を見出そうとするものであるともいえるだろう。

だが、構造化理論のこうした現象学的で構築主義的な傾向、すなわち、循環命題、両義性命題と名指すことができるような存在論的な曖昧さは、實在論的な社会理論による Giddens 批判の中心的な論点である。Archer は構造化理論が現象学的な知識社会学の伝統を引き継いで、社会構造と行為者の知識や意識の状態との相互依存関係を過度に強調していること、そして、その結果として構造が行為者に可能性を付与する局面と、行為者を制約する局面とを明瞭に切り分ける

ことができていないことを批判し、構造と行為主体性の「中心的な融合」と名指したのである⁽¹²⁾。实在論的な社会理論は構造化理論の構造概念をどのように批判しているのだろうか。Porpora の所論を取り上げて、さらに検討していこう。

4.5.2 实在主義的な構造概念による構造化理論への批判：Porpora

4.3節では Giddens の構造概念に対して Porpora (1989) が行った批判について検討した。その内容について若干の補足を加えながら要約すると、次の三点に整理することができる。

第一には、Giddens の構造概念の存在論的な曖昧さに対して次のような批判が行われている。Giddens は、構造とは仮想的 virtual であると述べるが、仮想とは不在を意味する、といった明確で強い主張を行っているわけではない。他方、Giddens は、構造特性 structural property、あるいは構造化する特性 structuring property という表現をしばしば用いている。このような表現は、構造が何らかの存在者 entity ではなく、何らかの性質 property であることを示唆しているようにも見える。だが、構造が何らかの性質であるにせよ、その場合、その性質が何に帰属するのか、という肝心な点については何も述べられていない。Porpora は、Giddens による構造の存在論的身分に関する説明が、極めて曖昧で不透明なものであることを批判している。

第二には、「規則としての構造」という定義に関連して次のような批判が行われている。Giddens は「規則」について論ずるさい、行為者の実践意識に内在して、行為を滞りなく継続させる「日常的なふるまいの規則」を中心に説明するが、他方、行為を外側から強制する、行為者どうしの立場や関係の違いに起因する、行為者にとって抗うことができない規則を無視している。また後者が前者に先行して存在することで、日常のふるまいのレベルでも、行為者を大きく制約していることについても、十分に論じられていない。Porpora は、Giddens が規則が成立させる社会統合や秩序について過度に強調し、規則に関連する社会的な葛藤や闘争について充分論じていないことを批判している。

第三には、「資源としての構造」という定義に関連して次のような批判が行われている。Porpora によれば、Giddens は資源について語るさい、行為者が認識する「資源に関する規則」について強い関心を寄せているが、行為者の認識とは独立に実在する資源の因果的な影響力については、十全な説明を与えていない。とくに資源の配分の不均等な関係が社会にもたらす帰結について論じられていないことは、Giddens の構造に関する議論における致命的な欠陥である。Giddens の資源に関する概念規定は、規則に関する概念規定のなかに吸収されるべき内容であり、Giddens による「資源としての構造」という概念規定は、実質的には空疎であり、無効である。

以上のように、Porpora (1989) では、Giddens の「資源としての構造」という構想が無効であること、Giddens には「規則としての構造」という構想しか残されていないこと、だが「規則としての構造」という Giddens に残された構想も不適切な内容であること、が主張されている。それでは Porpora にとって構造とは何であるのか。Porpora (1989) では、Giddens の「規則としての構造」への代案として「関係としての構造」という構想が提出されている。そして「構造を関係として構想する」relational conception of structure というこの方針は、Porpora (2015) に引き継がれている。同時に Porpora (2015) では、Giddens の構造概念のなかで唯一生き残っている「規則」についても、「構造」としてではなく、「文化」として扱われるべき概念であるこ

とが指摘されている。Porpora (2015) で示されたその構想は以下のようなものである。

Porpora にとっては、関係こそが社会構造を實在論的に説明するうえでの鍵概念である。社会構造を関係として概念規定するとは、どのようなことであるのか。Porpora は次のような存在論的な議論から始める。「ソクラテスとプラトンをシーソーの両端に座らせるとしよう。シーソーがどちらの方向に傾くかは、両者を切り離して考慮される、ソクラテスとプラトンの個体としての体重によって決まるのではない。彼らの個々の体重が重要なのではない。重要なのは、その二つの間の相違、つまり不一致があること、そしてどの方向の不一致なのか、である。因果的な効力を持つのは関係である。」⁽¹³⁾ Porpora は、関係の存在論的な身分について、さらに次のような説明を加える。

「二人の体重の相違は、ソクラテスとプラトンという個体としての体重に付随して発生する supervenient on the individual weight 、といえるかも知れない。しかし（関係が二人の個体としての体重に）付随して発生するという事 supervenience は、（関係が二人の個体としての体重に）還元されるということ reduction ではない。付随して発生する現象に対して、それが依拠する基礎的エレメントよりも上位の位置を措定しているのには、さらにもう一つの理由がある。・・・すなわち、批判的實在論では、存在措定の基準を因果に求める causal criterion of existence からである。この場合、因果的な効力を持っているのは個々の体重ではなく、その関係なのだから、関係は単なる抽象として存在するのではなく、存在論的に具体的な何物かとして存在するのである。つまり、関係の具体的な實在性は、時間と空間におけるその因果的な効力によって露わになっているのである」⁽¹⁴⁾

ところで、二人の人物の体重が相違しているという関係を、単体としての両名の体重から「付随して発生する現象」 supervenience としてとらえる視点は、Giddens が関係概念を、余剰現象 epiphenomenon として軽視したことに対抗して、打ち出されたのだった。Giddens にとって、関係は確かな存在論的な身分を持たない余剰現象であって、構造の概念規定に関係を持ち込むことは、構造化理論が克服しようとした構造決定論に逆戻りするという点でも好ましくないものだった⁽¹⁵⁾。それに対して Porpora にとって、関係は、因果的な効力を持ち、世界に差異を作り出すという意味で實在する対象であり、構造に関する概念規定は関係を中心に構想されなければならないのだった。

関係としての構造という概念を組み入れた社会理論の体系として Porpora が推奨するのが、Archer の SAC アプローチである。SAC アプローチ⁽¹⁶⁾は、物的関係としての構造 Structure、行為主体 Agency、文化 Culture という三つを主導概念とする社会理論である。SAC アプローチは形態創成・形態安定 (MM) アプローチ morphogenetic/morphostatic (MM) approach とも呼ばれている。

SAC アプローチによれば、「すべての人間の行為は状況として与えられた環境ないし文脈から始まる。それらの環境は、文化と構造という両者に関する環境である。つまり、人々は、他の社会的立場と関係づけられた何らかの立場から行為し、そして、人々は、独創的にというわけではなく、人々が住み込んでいる文化的環境を通じて行為するのである。行為の経時的な進行のなかで、行為者は、はじめに彼（女）らを拘束していた文化的環境と構造的環境を、双方とも、あるいはいずれかを、再生産したり改変したりする。前者の事態が Archer のいう形態安定であり、後者の事態が彼女のいう形態創成である。」⁽¹⁷⁾

構造の概念規定について、SAC アプローチと構造化理論の間にはどのような相違点があるのか。この点に関する Porpora の説明は、以下のように整理することができるだろう。第一には、Giddens が社会関係を余剰現象と捉えて、構造化のサイクルから社会関係という要素を排除しているのに対して、SAC アプローチでは、社会関係とは実在する構造であり、MM サイクルを構成する不可欠な要素として組み入れていることである⁽¹⁸⁾。

第二には、Giddens の構造化理論では、規則ないしスキーマ (Sewell) は、資源とともに構造を構成する要素として位置づけられているが、SAC アプローチでは、規則ないしスキーマは、構造としてではなく、文化として位置づけられていることである。「われわれは、Giddens が、もはや CR⁽¹⁹⁾ が語っている構造と同じものとはいえないほどに、構造概念を根本的に再定義してしまったことを、絶えず思い出さなければならない。もし両者が一つのものに融合されていないなら、・・・一方における規則ないしスキーマと、他方における行為の間には、一つの MM サイクルがあることについては承認しよう。だが、そのときわれわれが語っているのは、構造についてではなく、CR ならば文化と呼ぶものについてである。」⁽²⁰⁾

第三には、SAC アプローチでは、構造化理論が構造と行為主体性が中心的に融合しているのとは異なって、構造と行為主体と文化という三つのカテゴリーに、それぞれを独立の存在として分析する視座を示していることである。「われわれが構造と行為主体の相互作用について語ることができるのは、Giddens が提案しているのとは違って、両者が同一物として押し込められていない場合だけである。」⁽²¹⁾ SAC では、構造と行為主体を独立した存在として分析される。文化と行為主体の関係についても、「もし両者が一つのものに融合されていないなら」という条件を付したうえで、MM サイクルを見出しているのである。

第四には、Giddens の構造化理論が行為主体と構造という単一の関係を切り出して、単一の構造化サイクルを見出しているのに対して、SAC アプローチでは、行為主体と構造の関係、行為主体と文化の関係、という二つの関係を切り出して、二つの MM サイクルを見出していることである。もし、SAC アプローチから文化と行為主体の関係だけを切り出すならば、行為主体が規則やスキーマを引用して行為を繰り返すなかで、それらの規則やスキーマが、再生産されたり改変されたりする、という経時的な流れが見出されるだけであり、MM サイクルという新名称にもかかわらず、構造化理論に対する批判はより限定的なものに止まっていただろう。SAC アプローチは、構造を関係として構想し、そうした構造が行為に対する先行条件として行為者を強く拘束するものであることを示すことで、構造化理論への強いアンチテーゼを提供しようとしているのである。Porpora (1989) は、使用者が被用者に対して事前の合意なく超過勤務を強要している事例、使用者の暴言を被用者が受忍させられている職場ハラスメントの事例を用いて、構造を関係として捉える「関係論的社会学」が構造化理論に代わって採用されるべき社会理論であることを主張している⁽²²⁾。強制的超過勤務にせよ、職場ハラスメントにせよ、こういったタイプの日常的な相互行為を、日常的に行われているからという理由で、上司と部下が間主観的に共有しているふるまいのルールや、心理的な暗黙の合意だけで説明し尽くしてしまうのは適切ではない。こうした支配従属関係を生み出す物的な諸条件の解明こそがまず目指されるべき課題であるはずだ。構造化理論は、服従の内面倫理化の問題を論ずることはできるが、行為者の認知状況とは独立して存在し、行為者を強制する物的な諸条件を解明する視座を欠いている。構造化理論の構造概念では、行為者の知識能力とは独立に、彼（女）らの背後から behind their back 行為

者を拘束する不均等な関係という要因が見失われている。この点がSACモデルによる構造化理論批判の眼目である。

4.5.3 創発主義的な構造概念による論争の決着：Elder-Vass⁽²³⁾

本章ではGiddensの構造化理論による構造の概念規定を検討するとともに、それを独自の視点で読み替えようとした構築主義的な構造概念（Sewell）と、それを根底から否定しようとした関係論的な構造概念（Porpora）をとりあげ、その論争点がどのようなものであったのかを考察してきた。そこから明らかになったのは、構造化理論に端を発する論争の結果として、「構造」に関して三つの異なる立場が鼎立する状況が生じていることだった。このような状況のなか、構造に関して「全体としての構造」という第四の構想を提示することによって、この論争の主要論点をすべて吸収し、論争に決着をつけようとする意欲的な論文が『英国社会学雑誌（BJS）』に掲載された。それがElder-Vassの「制度的構造と関係の構造と身体的構造を統合する：創発主義の見解」⁽²⁴⁾である。この論文で示されている制度的構造、関係的構造、身体的構造という区分を、構造に関する一つの論理地図 logical geography と見做し、本章で登場した諸学説をそこに配置することを試みると、興味深い事実が浮かび上がってくる。表3に示されるように、本章で到達した構築主義的構造理論（Sewell）、関係的構造理論（Porpora）、構造化理論（Giddens, Stones）という区分は、Elder-Vassの制度的構造、関係的構造、身体的（身体化された）構造、という区分と正確に対応しているのである。本論文で見えてきたように、構造化理論を一つの発火点として、英語圏の社会学者たちは、構造概念に関する論争を執拗に繰り返してきたが、その論争は、決して収拾のつかないような分裂に陥ったわけではなかったし、分裂し混沌したまま消滅したわけでもなかった。論争を丹念に追うことで、今後の研究の道標となり得る確かな論理地図を得ることができるように思われるのである。このことは、日本の社会科学系のアカデミアにおいては、学術論争そのものが全般に低調である、という残念な事態にあることを思えば、特筆するに値する達成といえるのではないだろうか。Elder-VassのBJS論文は、構造概念に関する学説の鼎立状態を鳥瞰したうえで、自らの提案する「全体としての構造」という構想によって、この論争を最終的に決着させることを試みているのである。

表3 構造の概念規定に関する四つの類型⁽²⁵⁾
(Elder-Vass)

構造に関する規定	①制度・文化としての構造	②関係としての構造	③身体化された構造	④全体としての構造
構造と行為者の関係	構造は、行為者相互を導くことで秩序を作る	構造とは、行為者が相互につながったり依存したりする関係のことである	構造は行為者の身体に内部化されている	構造とは、行為者という部分からなる全体のことである
構造の具体例	婚姻制度 家父長制度 待ち行列 贈与交換	ネットワーク関係 社会階層の関係	記憶痕跡	組織 規範集団
本章で登場する理論の位置	構築主義的な構造化理論 (Sewell)	SAC モデル (Porpora)	構造化理論 (Giddens) 強い構造化理論 (Stones) ハビトゥス理論 (Bourdieu)	創発主義の構造化理論 (Elder-Vass)

Elder-Vass が提案する「全体としての構造」という構想は「関係的創発」relational emergence という独自な存在論的な概念を軸に展開されている。「創発」とは何か。そして「創発する全体としての構造」とは何か。Elder-Vass (2008) では、次のような簡潔な説明が与えられている。「創発については膨大な文献があるが、この論文の目的にかなうように、比較的単純に、以下のように要約することができるだろう。全体 wholes は、それらが創発的特性 emergent property を有するとき、創発的 emergent である。そして、もし部分がその全体のように組織されていない場合には、その特性は部分によっては所有されないのだとしたら、その全体の特性は創発的である。」⁽²⁶⁾このような創発の概念規定は、「関係的創発」と呼ばれる。Elder-Vass の着想は、全体を構成する部分間の関係について、「もし部分間の関係がこのようでなかったとしたら」という現実とは異なる反実仮想 counterfactual に依拠している。もし部分がこのように組織されていなかったら、この特性は生まれなかっただろうといえる場合、現にある特性は、部分間の関係によって生じている（創発している）、そして関係によって創発した特性は、部分にではなく、全体に帰属する、という着想である。Elder-Vass は「吠えることができる」という犬の特性が、犬という全体の部分である諸器官相互の固有の関係から創発する、という具体例を用いて、関係的創発理論のエッセンスを次のように説明している。

「自然的世界から一つの簡単な例を挙げて、私のいいたいことを説明しよう。犬はたいてい吠えるという創発的な力（吠えることができるという特性）を有している。犬の声帯、気管、肺、口、頭脳は、すべて、このことが起こるために必要である。だが、これら部分のどれ一つをとっても、あるいはこれら部分のすべてがつなぎ合わされた場合でさえも、もしそれらが、生きた犬を形成するのに必要とされる解剖学的な関係へと（これら器官以外の部分とともに）組織されていなかったら、犬は吠える力を持たないだろう。われわれは、これら諸部分が、このように結合されることで、どのように吠える力を作り出すのか、を説明することができる。だがこのことは、この力が生きている犬という全体によってだけ所有されるのであり、部分によって所有されるのではない、という事実を消し去ることはできない。」⁽²⁷⁾

「これら部分のすべてがつなぎ合わされた場合でさえも、もしそれらが、生きた犬を形成するのに必要とされる解剖学的な関係へと組織されていなかったら、吠える力を持たないだろう」と

いう文の前半で Elder-Vass が行っているのは、例えば、もし犬の声帯が気管にではなく、肺に繋がっていたとしたら、というような反実仮想である。このように反実仮想された畸形の犬は、吠える力を持たないに違いない。だから吠える力という犬の特性は、声帯、気管、肺、口、頭脳など、部分どうしの固有の関係から創発する、というわけである。Elder-Vass の関係的創発というテーゼを要約するなら「もし部分間の関係がこのように組織されていなかったら、全体が持つ何らかの特性は生まれなかったのだから、その特性は、そのような関係によって組織された全体に帰属される創発特性である」ということになるだろう。

次に考えなければならないのは、以上のような関係的創発理論において「構造」という概念にどのような居場所を与えることで、社会に対する正しい認識が得られるようになるか、という問題である。この問題に対して、Elder-Vass は、さしあたり「全体としての構造」Structure-as-wholes という規定を与えている。だがこの規定は「構造とは全体のことである」という直示的な定義を意味するものではない。Elder-Vass は家やビルディングのような建造物全体を構造と呼ぶことがあるのと同じ意味で、「全体としての構造」という用語を用いている⁽²⁸⁾。この規定の背景にあるのは、全体 whole は、①存在者 entity、②諸部分 parts、③創発特性 emergent property (ないし実在する因果的力 real causal power)、④因果メカニズム causal mechanism、⑤関係 relations、という、創発をもたらす五つの構造要素 structural elements から成り立っている、という批判的実在論に固有の創発主義的存在論⁽²⁹⁾である。

構造要素とは何か、そして「全体としての構造」という構想においてそれぞれの構造要素はどのような位置を占めるのか。構造要素に関する記述は、BJS に投稿された2008年の論文では、字数の制約から断片的なものに止まっていた。創発主義的存在論に依拠する五つの構造要素についての説明は、その後2010年に出版された『社会構造の因果的力』において、その全貌が示されることとなった。Elder-Vass (2010) において、まず①存在者、②部分、③創発特性は次のように説明されている。「この創発主義的存在論の第一の重要な要素は、存在者 entity である。存在者は、その部分 parts である他の存在者によって組み立てられている全体 wholes・・・である。例をあげるなら、細胞によって組み立てられている生物器官、原子によって組み立てられている分子などが含まれるだろう。・・・存在者は実在の因果的力 real causal power を持つことができ、この力をその存在者の創発特性 emergent property と呼ぶこともできる。・・・ある因果的力ないし創発特性は、ある存在者が、それ自身の力によって、世界に対して何らかの種類の因果的な効果を及ぼすことができる、そうした存在者の能力のことである。その因果的な効果は、その存在者の部分が、当の種類の存在者のように組織されていなかった場合に、その存在者の部分によって作り出されるであろう効果以上に大きな何かである。」⁽³⁰⁾ 続いて④因果的メカニズムと⑤関係について、次のような説明が行われる。「創発特性は因果メカニズム causal mechanism の産物である。因果メカニズムは部分同士の相互作用に依存する諸過程である。その相互作用が起こるのは、それら諸部分がある全体へと組み立てるような特別の関係 relations において組織されているときにだけである。そのとき全体がこの創発特性を持つのである。」⁽³¹⁾

このように、構造は五つの構造要素に分岐していて、また五つの構造要素のはたらきによって「全体が創発特性を持つ」ことになる。五つの構造要素を用いて「全体という存在者」を浮かび上がらせ、「全体が創発特性を持つ」ことを強調することの存在論的な意義はどこにあるのか。「それら（実在する因果的力ないし創発特性）は、適切なタイプの全体が存在するときにだけ存在す

る。だから、それらはこのタイプの全体の因果的力であって、諸部分の因果的力ではない。つまり、創発主義的存在論は、還元主義の問題を解決できるのである。この存在論は、因果的説明において、高階の（つまり全体の）特性が（部分によって）科学的に説明されうること、つまり説明的な還元を容認するが、この特性が、部分の特性に取って代わられること、つまり消去的ないし存在論的な還元を容認しない。」⁽³²⁾ Elder-Vass の存在論的立場は、全体の特性を部分の特性によって説明し尽くしてしまう explain out、つまり全体の存在を消去してしまう、「消去的還元」を拒否し、全体の特性を「部分間の関係」によって説明しつつ、全体の存在への懷疑は拒絶して「説明的還元」を採用する、というものである。説明的還元の立場では、部分間の関係など、すべての構造要素は、全体という存在者を想定しない限りは根拠を失う概念である。

以上から、「全体としての構造」という概念の前提にどのような存在論があるのか、その全貌が明らかになった。そこで再び2008年の BJS 論文に戻ろう。BJS 論文で Elder-Vass は「全体としての構造」という構想を採用することで、構造に関して、これまで闘わされてきた主要な論点を自らの理論のなかに回収し、論争に最終的な決着をつけることができることを主張している。

（1）関係としての構造

第一に、Elder-Vass は「関係としての構造」という概念規定に関して次のように述べる。

「“関係としての構造”という概念は、創発主義者の構造に関する見解にいと簡単に調和する。何故ならこの概念は、どのくらい正確にであるかはともかくとして、創発主義者にとっての一般的な構造要素の一つ、つまり全体を構成する諸部分の間の諸関係、あるいは諸部分を組織する諸関係、という要素に対応しているからである。」⁽³³⁾ Elder-Vass は、「関係としての構造」という構想には、創発主義との間に対応関係があることを認めつつも、これに続く文章では、それに対して、次のような警告を発することを怠らない。「しかしながらこのような対応関係は、社会構造に関する多くの説明において、全体が存在するということ、そして個々の関係的な構造は、全体を組織しているということを認識するのに失敗すると、不明瞭になるかも知れない。」⁽³⁴⁾ 創発主義的な用語を用いて補足するなら、関係がもたらす何らかの因果的な力は、関係によって組織された全体という存在者に帰属される創発特性として認識せよ、ということになる。この点について、Elder-Vass は次のように述べている。「関係としての構造は、組織のような（全体としての）構造の部分である、諸個人の間の重要な意味を持つ関係として、これらの構造の因果的効力が創発するさいに、もっと明瞭な役割を果たしている。しかしすでに見たように、関係はそれだけでは何物も引き起こすことができない。・・・関係としての構造は、全体という社会的存在者に対して、因果的な効力をもたらすことに貢献するものとしてのみ、有効である。」⁽³⁵⁾

以上のように Elder-Vass は構造を説明するうえで「関係」という要素が果たす重要な意義を承認しつつ、関係が力を発揮するのはあくまでも「全体」を構成する部分間の関係としてである、として「全体としての構造」という構想の優先性を主張しているのである。この主張を、先の項で取り上げた Porpora によるソクラテスとプラトンの「関係」に適用して説明すれば、次のようになるだろう。ソクラテスとプラトンの体重差が世界に差異を作り出すことができるのは、両名が同一の時空間において組織されている、アカデミックであるか、政治的であるかの、なんらかの共同体という「全体」の「部分」として、何らかの役割を果たすためにシーソー上で対面する、という相互行為（「因果メカニズム」）を行う限りにおいてである。両者の体重差という関係

を、独立した何らかの存在として措定したとしても、両者が、何らかの全体の一部をなす部分でないなら、世界に差異を作り出すような力は、潜在しているかも知れないが、創発しない。同じく Porpora が取り上げている、強い上司と弱い部下という不均等な関係も、この上司と部下が企業における、ある職場組織という全体の一部をなす部分と部分であることで、ハラスメントや不払い残業を発生させるような因果的力を創発させるのである。

(2) 制度としての構造

第二に、Elder-Vass (2008) は、「制度としての構造」という概念規定に関しても、これを創発論的な制度に関する議論のなかに統合していくことが可能である、と述べている。そのための鍵となる論点は、以下の二つである。「第一には、・・・創発主義の存在論の用語を用いるならば、制度とは特性 property である。第二には、特性としての制度の因果的な効力は、そうした特性を持つ存在者の実在 existence of entity、つまりこの場合は規範集団の実在に由来し、そしてその集団を形成する諸部分と諸関係に由来する。」⁽³⁶⁾

第一の論点、すなわち「制度とは特性である」というテーゼは何を意味しているのだろうか。BJS 論文における説明は、必ずしも充分なものとはいえない。ここでは、2012年に出版された『社会構築の実在性』⁽³⁷⁾に依拠して若干の補足をしておこう。Elder-Vass (2012) では、制度的事実 institutional fact に関する Searle の議論⁽³⁸⁾を援用して、制度は、機能の割り当て、集団的志向性の督励、構成的規則による統制、という三つを通じて、行為者に可能性を付与 enabling できること、すなわち、制度は社会に力を付加できることを指摘している⁽³⁹⁾。そして具体例として貨幣制度を取り上げ、次のように述べる。「貨幣制度は、一束の紙幣の持ち主に対して、モノを買うという権利、すなわち力を授与 confer する。だから紙幣の持ち主は義務を課す力 deontic power の持ち主である。」⁽⁴⁰⁾

Elder-Vass による貨幣制度に関する上記の議論を、筆者が理解する創発理論による構造要素の用語系を用いて補足するなら、次のようになるだろう。ナマの事実 brute fact⁽⁴¹⁾としての貨幣は、長方形の紙切れだったり平板な円筒形の金属片だったりする存在者にすぎない。存在者としての貨幣が何からできているのか、それを構成する部分が何であり、部分と部分がどのような関係になっているか、といった問いは、貨幣制度を考えるうえで、殆ど意味をなさない。貨幣制度が社会にとって意味を持つのは、貨幣が所持者に力を与えるからである。創発理論の用語で表現するなら、所持者に与えられるこの力は、世界に差異をもたらす因果的力であり、貨幣制度の創発特性である、といえよう。さらにいえば、Seale が列挙した「機能の割り当て」、「集団志向性の督励」、「構成的規則による統制」という三つの概念は、貨幣を使用する人々の相互作用に関わる概念であり、創発特性を作り出す因果メカニズムに言及している、と理解すれば、これら概念も、創発理論のなかにうまく回収することができるだろう⁽⁴²⁾。だから「制度とは特性である」というテーゼは、「制度は構造要素としての創発特性を中心に論じられるべき主題である」と言い換えることができる。

第二の論点、すなわち「制度がもたらす創発特性は規範集団に由来する」というテーゼについても、創発理論の構造要素に関する用語系をきちんとあてはめることで、正確な理解が可能になる。Elder-Vass は BJS 論文において、制度と規範集団についてさらに次のように述べている。「規範集団がなければ制度は存在することができず、だから、制度としての構造は、ある全体をなす

社会的存在者が実在することに依存している。さらには、制度をして、諸個人が抱く規範的な信念の単なる集積以上の何物かにならしめる、規範集団メンバー間の関係がないとしたら、規範は存在することができない。」⁽⁴³⁾

だが、「制度をして、諸個人の規範的な信念の単なる集積以上の何物かにならしめる、規範集団メンバー間の関係」について、その「関係」が、どのような「部分」からなる関係なのか、それがどのような「因果メカニズム」を構成し、どのような創発特性を生み出しているのか、という点に関わる実質的な説明は、BJS 論文では与えられていない。この部分について、Elder-Vass (2012) から補足しておこう。なお、Elder-Vass (2012) では、規範集団は規範サークルと言い換えられている。Elder-Vass (2012) によると「規範サークルは特定の規範を承認し、履行することにコミットした人々からなる集団のことである。そうした集団は、人々をその部分とする社会的存在者である。そうした集団のメンバーが相互作用する様式（メカニズム）のゆえに、集団は、個人が標準化された慣行に従う傾向を作り出す因果的な力を持っている。」⁽⁴⁴⁾

Elder-Vass が取り上げている、最も単純な規範サークルは「路上における通行に関する規範サークル」である。「ある社会的文脈においては、もし立ち止まっている人が、向こうからやってくる他人の進路を塞いでいたら、その人が通れるように横に動くという規範がある。あるふさわしい文脈のもとで、Aさんは、自分がBさんの進路を塞いでいることに気づいたとしよう。さて、もしAさんが横にどき、Bさんが上記の規範を承認し、履行しているとするなら、Bさんは微笑んだり、頭を縦に振ったり、口頭で感謝したりすることで、Aさんの行為に対する承認を示唆するだろう。反対に、もしAさんがそうしなかったら、Bさんは、例えば、睨んだり、押したり、大声で「失礼」と言うなどして・・・、規範の履行を促すだろう。もしAさんが、繰り返して、色々なBさんによるこのような振る舞いに曝され続けるとしたら、そしてAさんが少しでも社会を知っているなら、Aさんはすぐに、そうした状況では、自分が横にどくことを期待されていることを理解し、そのようにする傾向を発達させるだろう。そしてAさんはその規範を自分でも承認し、履行し始めさえするかも知れない。」⁽⁴⁵⁾

規範集団においては、規範を履行する行為に対しては、メンバーから報償が与えられ、規範に反する行為に対しては制裁が科せられる。このように、報償・制裁という相互行為のメカニズムが、規範の承認・履行を強化する、という創発特性を作り出すのである。だから、「制度の創発特性は規範集団に由来する」という第二のテーゼについて、創発理論における構造要素の用語系を適用して整理すると、次のようになるだろう。

- ①全体としての存在者＝規範サークル
- ②全体を構成する部分＝規範サークルの成員である諸個人
- ③創発特性（因果的力）＝規範の承認・履行が強化されること
- ④因果メカニズム＝諸個人間の相互行為における報償と制裁
- ⑤関係＝規範サークルの成員である諸個人間の関係

Elder-Vass (2010) では、路上通行、待ち行列などに関わる単純な規範サークルを「相互行為集団」interaction group と名付けているが、規範サークルは、もちろん、このような単純なものに尽きるわけではない。Elder-Vass (2010) では、スケートボードのパフォーマンスを競い合

う少年たちの「結社」association、理髪屋に定期的に集まって、それぞれのパートを担い、歌の稽古に励む合唱団のような「単純な組織」、権威関係を伴う企業のような「複雑な組織」、といったさまざまなレベルの規範サークルの事例を用いて、「制度としての構造」に関する議論が、すべて創発理論による構造要素の用語系、あるいは概念枠組みを用いることで、正確に説明し直せることを明らかにしている⁽⁴⁶⁾。制度は構造要素としての創発特性を中心に論じられるべき主題であり（テーゼ1）、また、創発特性の帰属先である全体（規範サークル）をどのように同定するのが、制度を理解する鍵となるのである（テーゼ2）。

（3）身体化された構造

第三に、Elder-Vass (2008) は、「身体化された構造」という規定に関しても、これを創発理論の構造に関する概念枠組みのなかに統合していくことが可能である、ということを明らかにしようとしている。Elder-Vass は、「制度としての構造」という議論に関しては、「創発特性」という構造要素と対応させて論じることで、創発論的な構造理論のなかに回収できることを主張した。これに対して「身体化された構造」という議論に関しては、身体を持った人々の相互作用による「メカニズム」という構造要素と対応させて論じることで、同じく創発論的な構造理論のなかに回収できることを明らかにしようとしている。

ところで、メカニズムは、創発理論の構造に関する用語系ないし概念枠組みにおいては、どのような概念として扱われているのだろうか。創発理論では、メカニズムとは、「全体としての構造」の部分として、様々な関係におかれた、様々な部分が及ぼし合う、相互作用のプロセスのことである。だがこの点については、もっと正確に理解しておく必要がある。Elder-Vass は、『社会構築の実在性』において、懐中電灯という事例を用いて、メカニズムを、次のような五段階からなる存在論的な議論に組み入れて説明している。

「(i) 懐中電灯は一定方向に光線を発光する、という因果的な力を持っている。(ii) この力はあるメカニズムに依存している。そのメカニズムとは、懐中電灯の諸部分⁽⁴⁷⁾、すなわち、乾電池、電球、それらをつなぐ配線、スイッチ、ケース、電球を囲む湾曲した反射鏡が、相互作用を及ぼし合うプロセスのことである。(iii) 他方、このメカニズムは、諸部分の特性ないし力に依存している。例えば、電球のフィラメントが電流を通したときに発光できる力や、スイッチが電気の回路を遮断できる力、に依存している。(iv) メカニズムは、懐中電灯のような形態に諸部分の関係が組織されているときの、それら諸部分の關係に依存している。(v) この発光する力は、懐中電灯の力であって、諸部分の力ではない。(従ってこの力は創発する因果的な力である。)なぜなら、乾電池、電球、配線、スイッチ、ケース、反射鏡は、もしそれらが懐中電灯の特徴的な形態につながり合わされていなかったとしたら、光線を発光することはできなかったからである。」⁽⁴⁸⁾

まとめれば次のようになる。第一には、メカニズムとは、ある構造を持った全体を作り上げている諸部分が、相互作用を及ぼし合うプロセスである。第二には、メカニズムは諸部分の特性ないし力、および諸部分間の關係に依存している。第三には、部分どうしが相互作用し合うプロセスであるメカニズムが作動することで創発する特性ないし因果的な力は、諸部分にではなく、全体に帰属する。

ところで、この懐中電灯を用いた説明は、一般的存在論の議論であり、社会的存在論のそれで

はない。懐中電灯のような無機物の構造に関してであれば、全体としての構造である懐中電灯の一部をなす、乾電池や電球などの部分が、身体を持たなくても、物質同士の相互作用のメカニズムは作動する。それに対して、社会的存在論の議論では、メカニズムについて人間の身体という要素を抜いて語ることはできない。なぜなら、社会構造を構成する部分は人間であり⁽⁴⁹⁾、人々の間の相互作用（相互行為と言い換えた方が正確であるが）のプロセスであるメカニズムの作動は、人々が身体を持った存在として備えている認知能力に依存しているからである。もし人々に身体がなければ、認知能力を用いて、相互作用のメカニズムを適切に作動させることはできないだろう。例えば貨幣制度のような社会構造の場合、貨幣を用いて商品を販売したり購入したりする相互行為のメカニズムが作動するのは、貨幣を使用する人々が、ナマの事実としては紙片切れや金属片に過ぎない物質が、彼（女）らの棲む社会では、商品交換の媒体として流通していることを認識しているからである。ここで、「身体としての構造」という構想の中心的論客である、Giddens の構造化理論のことを思い出そう。Giddens の構造化理論の中心命題は、構造と人々の相互行為の再生産を支えているのは、行為者の知識能力であるということ、そして知識能力は身体（脳）の記憶痕跡という部位に埋め込まれている、ということだった。構造化理論においては、構造と行為主体性の再生産は身体に埋め込まれている記憶痕跡に依存する、という説明が繰り返し行われている（本論文第3章）。Elder-Vass が試みたのは、こうした構造化理論による「身体化された構造」という構想を、自らの「全体としての構造」という構想のなかに回収するとともに、前者の構想に含まれた偏向を批判することだった。以上のことを確認して、BJS 論文に戻ろう。

Elder-Vass (2008) では、Giddens、Stones、Bordieu に共通する「身体化された構造」という構想は、創発理論における「メカニズム」という構造要素に相当する部分に焦点をおいた議論である、との理解が示されている。このことは、Giddens らによる「身体化された構造」という構想について言及した、Elder-Vass (2008) の次のような記述から確認できる。「身体化された構造に関するここまでの議論は、・・・部分とそれらの特性が、高位レベルの全体の特性を支えるメカニズムのなかに示唆されている、と見なすような見解と完全に合致している。」「制度に関する説明では、個人が抱く規範的な信念は、制度の因果的な力を支えるメカニズムの必須の一部であった。」「身体化された信念は社会構造を支えるメカニズムにおいて極めて重大な役割を果たす。」⁽⁵⁰⁾

断片的ではあるが、この三つの文から、Elder-Vass が、「身体化された構造」という構想を、ある種のメカニズムとして理解し、それゆえに創発主義の構造理論と対応する部分を含んでいると評価していることが分かる。身体化された構造という議論は、メカニズムという構造要素に言及するものとして解釈すれば、創発主義的な構造理論のなかに回収できるだろう。他方、Elder-Vass (2008) は「身体化された構造」という構想に対して、次の二つの点をあげて、批判している。

第一の批判は「身体化された構造」という構想が、存在論的な錯誤を犯していることに向けられている。「身体化された構造」という規定には「構造それ自体が個人の部分となることができるという示唆があり、・・・これは深刻な誤解を招く」⁽⁵¹⁾という批判である。「構造それ自体が個人の部分となる」という命題が存在論的な錯誤である、という疑念について、Elder-Vass は、Stones と Bourdieu による構造概念に言及しながら、次のように述べている。

「Stones によれば、“構造化理論は、構造を知識能力または記憶痕跡として、部分的に行為者の内部に入り込んだものとして概念規定を行っている”⁽⁵²⁾。Bourdieu も同様の議論を行い、われわれのハビトゥス habitus を構成する性向 disposition を、“構造を作る構造として機能するように、あらかじめ埋め込まれた構造化された構造”⁽⁵³⁾として、また、“外部性が内部に入り込んだもの”⁽⁵⁴⁾として、記述している。字句通りに受け止めるならば、高位レベルの全体（ここでは社会構造）がそれ自身の部分（個人）の一部であり得るという示唆は、ここで提唱している实在論／創発論の見解によるならば、一つの存在論的な錯誤である。」⁽⁵⁵⁾

構造が個人の身体に入り込んでしまうなら、「全体としての構造」は消去的に還元され、存在論的身分を失う。そうなれば、構造の因果的力は個人に帰属されるほかなくなってしまう。これは創発理論にとって全く容認できない錯誤であるといえよう。

第二の批判は、構造化理論に代表される「身体化された構造」という構想が、知識について、あまりにも内在主義的な偏向に陥っていて、知識の社会学、知識の社会理論として、容認できない錯誤を含んでいることに向けられている。Giddens、Stones、Bourdieu に共通する「身体化された構造」という構想では、身体化された構造とは、行為者が自らの身体（例えば脳内の記憶痕跡という部位）に取り込んだ知識ないし知識能力であるほかなく、その個人に内属する特性や力として捉えられている。だが Elder-Vass は、このような理解は、知識に関する内在主義的な偏向にはほかならないと考え、次のように批判する。「構造が知識を作り出すプロセスのなかに含まれているという事実は、これらの構造が必ずその製造物 product（である身体化された知識）のなかに移住したり内在したりすることを意味するわけではない。身体化された信念は、社会構造を支えるメカニズムのなかで、不可欠の役割を果たすけれども、だからといって、・・・身体化された信念が、身体化された構造であるわけではない。」⁽⁵⁶⁾

「身体化された構造」という構想における知識概念が、内在主義的な錯誤を含んでいる、という批判は、『社会構造の因果的力』において、Giddens の構造化理論をターゲットとして、さらに詳細に展開されている。Elder-Vass は、「Giddens の構造化理論の最も論争的な側面は、おそらく、構造は・・・実践の外部には、そして実践の再生産に関わる人間的主体の精神の外部には存在しない、という主張である」⁽⁵⁷⁾とする。そうした Giddens の主張は、「構造は個人の外部には存在しない。構造は、記憶痕跡として、社会的実践のなかで具現化されるもの instantiated in social practice として存在し、・・・個人の活動の外部にあるというよりは、・・・もっと内部にある」⁽⁵⁸⁾という引用によって例示されている。Giddens は、なぜ知識に関して、それを個人の身体に内属させる内在主義的な視点に囚われてしまったのだろうか。Elder-Vass は、その理由を、構造化理論が、知識を規範サークルのような、人々に外在し、人々を部分として組織している「全体」との関係で論じる視点を持っていないことに求めている。

「彼（Giddens）は知識を個人の一部分としてとらえているので、ここから導かれるのは、構造は強い意味で個人の一部分である、ということだろう。しかしこの議論は、本章で行った規範サークルが行動に影響を与えるという・・・説明を・・・完全に無視している。個人は、確かに規則を身体化し、行動に影響を与える知識（より正確に言うなら、信念と性向）を持っている。だが、この知識は、個人が直面している外的な規範環境「の知識」、あるいは「についての知識」、あるいは「によって作り出される知識」である。記憶痕跡として存在しているものは、われわれが直面している構造的な影響要因（この場合、規範サークルが規範を承認・履行する実践）につ

いてのわれわれの知識であって、構造それ自体ではない。この外的な規範環境を、それについての個人の知識のなかに押しつぶしてしまうことによって、ギデنزの規範的な社会实践の再生産における構造的な契機を消去してしまっている。しかし (a) 現実に規範サークルが存在していることと、(b) いずれかの特定の個人がそれについて持っている信念、との間には、一方を他方に還元することはできない存在論的な区別がある。ギデنزの説明にはこのような区別が欠けているので、・・・両者の関係について研究することが不可能となっているのである。」⁽⁵⁹⁾

以上のように、Elder-Vass は、Giddens の「身体化された構造」という構想には、規範サークルのような「全体」という視点が欠けていることを指摘し、Giddens が知識に関して内在主義的な偏りに陥っていることを批判している。この批判は妥当なものといえるだろう。また、「身体化された構造」というプロジェクト全体に対して、「社会構造を身体化された構造としてだけ見なそうとする試みは、本来的に還元主義的であり、実際に方法論的に個人主義的である。われわれは、身体化とは社会制度という構造を構成するものの一部分に過ぎないことを承認するや否や、このような還元主義的動きを拒絶するだろう」⁽⁶⁰⁾と批判する。この批判も妥当なものといえるだろう。

(4) 全体としての構造

以上 (1) から (3) までの議論から、「全体としての構造」という構想を打ち出すことで、「関係としての構造」、「制度としての構造」、「身体としての構造」という三つの構想の間で闘わされてきた論争に決着をつける、という Elder-Vass の意欲的な試みの全貌が明らかになった。Elder-Vass は「身体としての構造」という構想に言及した結論部分において、「身体化という概念は、関係としての構造、制度としての構造、という概念と同様、社会構造の作用の一側面を記述するものではあるが、その記述は、身体化されることのできない諸側面の分析によって補完されなければならない。そこには、個人間の関係だけではなく、諸個人ならびにこれら諸関係の組み合わせから生じる要素、つまり、全体という社会的存在者ならびにその諸特性もまた含まれる」⁽⁶¹⁾と述べている。さらに「全体」と「関係」、「制度」、「身体」の関係を総括して次のように述べている。「社会構造の第四の側面、すなわち全体という社会的存在者を加えることによって、・・・社会構造の三つの側面が相互にどのように関係し合っているのかをより完全に理解することが可能になる。社会構造という用語は曖昧に用いられているけれども、この用語は常に、全体という社会的存在者のいずれかの側面に言及している。しかし社会構造に関する殆どの説明において、全体という社会的存在者は祝祭に顕れる霊くらいのものに止まっている。全体という社会的存在者が現に存在することを承認することなくしては、また承認されるまでは、社会構造の特性、構造を構成する諸部分、それら諸部分の間の諸関係の影響力を理解することは困難である」⁽⁶²⁾と述べている。「関係」は「全体」を構成する諸部分の間の「関係」としてのみ存在する。「制度」は、諸部分を固有の関係によって「全体」へと組織することによって、「特性」を創発する。「身体」は全体の部分である人々の信念を担うことで、特性を創発させるメカニズムを支える。細部にわたる検討はまだ十分に尽くされたとはいえないが、以上の結論は、おおむね妥当なものであると考えられる。

ところで、構造に関する以上の四つの構想は、本論文全体の中心テーマである「知識」をどのように捉えていたのだろうか。その相違点を筆者なりの視点から簡潔な形で整理しておくことで、

本章を終えることにしよう。

①まず関係としての構造という構想においては、知識は居場所を与えられていない。SAC モデルでは、知識は文化に関する重要概念であるが、構造とは関わりを持たない。構造は人々の認識とは独立に、背後から behind their back 人々を拘束する力として理解されている。

②制度としての構造という構想においては、知識は社会に外在している。知識は社会にストックされて世代から世代へと受け継がれる。知識に対する個人の関わりは受動的である。巧みな知識能力を活用して、ポトラッチの制度を司る酋長の振る舞いは、一面では能動的と言えるが、ポトラッチに関わる知識は先行世代から引き継がれて社会に外在しているのだ。

③身体としての構造という構想においては、知識は人々の身体に内在している。知識は、記憶痕跡などの部位において、個人の内部に埋め込まれている。知識に対する個人の関わりは、過剰に能動的である。

④全体としての構造という構想においては、知識は、制度と身体という双方の側面から把握されている。知識は社会に外在し、個人に内在している。社会に外在する知識が、一方的に個人に内在する知識に転化していく局面が続くなら、構造は再生産され、行為者が主体性を発揮できる余地はない。反対に社会に外在する知識が、個人に内在する知識によって反省的に見直される局面では、構造が変容する契機が生じ、行為者が主体性を発揮する機会が生まれる。

以上の考察をまとめれば、表4のようになるだろう。

表4 構造と知識の関係

	個人に内在する知識	社会に外在する知識
関係としての構造		
制度としての構造		○
身体としての構造	○	
全体としての構造	○	○

5. 各章の要約と結論

最後に、本論文全体の要約と結論を記そう。以下においては、これまで連載の形で本誌に掲載されてきた各章の内容を要約するとともに、各章ごとの論旨の一貫性を高めるために、若干の補足と追記を行う。

<第1章>

これまで本論文では、1970年代の英国に登場した社会理論である、Giddens の構造化理論の内容を検討するとともに、構造化理論を主要なターゲットとして行われた、英語圏の社会学者によるいくつかの論争のレビューを行ってきた。構造化理論それ自体、そしてそれを批判したり擁護したりする諸論考の検討を通じて、筆者が試みたのは、構造化理論の中核にある、行為者の知識能力 knowledgeability という概念を中心とする社会学の論理地図を描き出すことだった。本論文の第1章においては、構造化理論の概要を説明するとともに、続く三つの章において、構造化

理論を主導する、二重性 duality、行為主体性 agency、構造 structure、という鍵概念をそれぞれ主題として取り上げ、それら概念をめぐる主要な論争点を洗い出し、「知識の社会学」の論理地図を描き出していく、という構想が示された。

<第2章>

第2章においては、構造化理論における二重性 duality という概念と、それをめぐる論争について検討した。Giddens は構造の二重性について、次のように述べている。「“構造の二重性”ということで私が言おうとしているのは、社会構造は人間の行為主体性“によって”作られていると同時にそれを作り出す“媒体”でもある、ということである。」⁽⁶³⁾「構造の二重性とは、社会生活が社会的実践のなかで構成されるさいの本質的な循環性 recursiveness のことを指している。すなわち、構造は実践が再生産されるための媒体であるとともに、実践が再生産されることの結果でもある。」⁽⁶⁴⁾構造と行為主体性、あるいは構造と実践が相互に循環する二重性 duality という図式は、従来の社会理論がしばしば陥っていた「構造か行為か」という二元論 dualism から脱却するための方途として考案されたものである。Giddens が批判しようとしたのは、社会を構造だけで基礎づけようとする物象化、そして逆に行為者の行為だけで基礎づけようとする主意主義、という、二つの両極的な偏りだった。Giddens は構造と行為の関係に関して、「どちらがどちらを根拠づけているのか」という基礎づけ主義的な問題設定を棄却して、社会を構造と行為が相互規定的に循環する姿において捉え直そうとしたのである。

こうした Giddens の二重性というアイデアを厳しく咎めたのが Archer であった。Archer によれば、Giddens は確かに、構造と行為主体性の関係を理解する上での両極的な誤りである、物象化と主意主義とを回避しようとしているが、そのさいに、両者を分析上分離させることができないほどに、融合させてしまう中心的融合 central conflation という別の誤りに陥ってしまった、と指摘する。Archer によれば、二重性という構想は、構造と行為主体性を、平板な存在論に基づいて分離不能な同一地平に押し込めることを意味している。二重性という視点に立つことから、構造化理論では、構造が独立した存在として行為者に影響を行使するという側面、そして行為主体が独立した存在として構造についての反省的な熟慮を行う力を発揮するという側面、についての確な説明を与えることができない。二重性の概念によれば、分析の焦点は、常に、構造と行為主体性を結びつけている、熟達した行為者による社会的な実践に向けられるしかなく、そのような分析では、構造と行為主体性を分離して、両者の間の因果関係を正確に論ずることができない。Archer が構造化理論の二重性概念を批判するなかで提出しているのが、「関係としての構造」という概念である。この概念については、Archer と同じ批判的实在論の立場を取る Porpora の所論を検討する4.5.2項において再論されることになる。

第2章においては、さらに、Mouzelis による二重性概念への批判と、その批判を踏まえた Stones による二重性概念の擁護の試みについても検討した。Mouzelis は Giddens が二重性の事例として取り上げている言語を題材として、次のように Giddens を批判する。Mouzelis によると、言語規則という構造と、アクターの行為との関係を考える場合、Giddens のように生活者が日常言語を発話することで、言語規則が再生産される、という局面だけを見るのは適切ではなく、言語学者が特定の言語の言語規則を研究する、という局面についても見なければならない。前者についてだけなら、構造と行為との関係を二重性という概念で説明することは適切だが、後者の場

合は、構造と行為の関係は客体・主体の二元的関係として説明されなければならない。Mouzelis は、社会的行為を二元性概念ではなく二重性概念によって説明しようとする構造化理論を、次のように批判する。「もし Giddens にならって主体・客体の二元論を社会学の議論において禁止するなら、制度的な秩序が、いかにして再生産され変容されるのか、ということについて、極めて不完全な説明を与えるだけに終わってしまうことになる。これではまるで、複雑な建造物の建築を、もっぱら個々の煉瓦工のルーティンな活動だけに集中し、設計士、エンジニア、管理者、労働組合指導者などを無視して説明しているがごとくである。」⁽⁶⁵⁾

こうした批判を受けて、Stones は、人々の日常的なふるまいや、煉瓦工のルーティンな活動だけではなく、言語規則を研究する言語学者の活動や、建造物の建築に関わる設計士、エンジニア、管理者、労働組合指導者の活動についても、二重性の概念によって説明できることを主張して、構造化理論の擁護を試みている。Stones は、構造と行為の関係に関しては、Mouzelis が指摘したような、二つのタイプに区分することが可能であることを容認しつつ、だがどちらのタイプについても、二重性概念でその関係を説明できることを主張する。Stones によれば、社会を構成する構造と行為の関係については、「当たり前のこととして受け止められる二重性 taken-for-granted duality」と「批判的で自省的な二重性 critical and reflexive duality」という二つのタイプの二重性で説明できる⁽⁶⁶⁾。前者は日常言語の発話のような事例において、後者は言語学者の言語規則研究のような事例において、成立する二重性である。そして、Stones によれば、「当たり前のこととして受け止められる二重性」を支えている行為者の知識能力は、Giddens のいう実践意識 practical consciousness であり、「批判的で自省的な二重性」を支えている行為者の知識能力は Giddens のいう論述意識 discursive consciousness である。

「当たり前のこととして受け止められる二重性」と「批判的で自省的な二重性」という二つのタイプの二重性に関連して、Stones が主張するもう一つの論点は、両者の境界を明確に区切ることが困難で、構造と行為主体性の関係は、両者を両極とする「二重性の連続体」として理解するべきである、ということである。二つのタイプの二重性についてその境界を明確に区切ることができない理由は、Stones によれば、それぞれの二重性を支える、行為者の実践意識と論述意識が、相互に浸透し合う関係にあるからである。実践意識と論述意識の相互浸透という論点については、第3章で再論される。

<第3章>

第3章においては、構造化理論における行為主体性 agency という概念と、それをめぐる論争について検討した。構造化理論では agency は構造 structure と正確に対応させるべき、同様に抽象度の高い概念として使用されることが多い。そこで本論文においても、agency という概念には行為主体性という非実体的な訳語を当てることで、構造＝仮想という Giddens の存在論的主張を真摯に受け止めて考察を進めていくことにした。

第3章ではじめに行ったのは、Giddens による行為主体性についての概念規定の検討である。Giddens は、行為主体性について「世界内の事象の継続する過程に対して、身体を持った存在が、現実的に、あるいは熟慮のうえで、因果的に介入していく流れ」⁽⁶⁷⁾と定義している。第2章で二重性概念を検討するなかで登場した、「当たり前のこととして受け止められる二重性」と「批判的で自省的な二重性」という重要な議論と接続させて、この定義を読むなら、次のような社会

理論を読み込むことができるだろう。すなわち、「①現実的に、あるいは②熟慮のうえで」という区分によって、世界内事象の継続的過程への「①現実的な」介入によって「当たり前のこととして受け止められる二重性」が達成され、「②熟慮のうえでの」介入によって「批判的で自省的な二重性」が達成されるという社会理論の構想が展開されているのである。そして第2章での議論を踏まえるなら、「現実的な」介入を支えるのが行為者の実践意識、「熟慮のうえでの」介入を支えるのが行為者の論述意識、ということになる。行為主体性に関する上記の定義において、「現実的」という語が「実践的」という語と同義で用いられていることは、上記の定義に続いて、次のような記述が追加されていることから、確証が得られる。「行為主体性という考え方は、“実践” Praxis という概念と直結している。そして規則正しい行動について話すさいには、私は、継続するひとつつながりの、“実践的活動”としての人間の実践について語りたい。」⁽⁶⁸⁾

第3章では、さらに、行為主体性を説明する「行為の再帰的モニタリング」、「行為の合理化」、「行為の動機づけ」という三つの重要概念についての Giddens の構想について検討した。Giddens によれば、「行為の再帰的モニタリング」とは、「毎日の行為の慢性的な側面であり、本人の行動のみならず他者の行動（のモニタリング）も含んでいる。」⁽⁶⁹⁾ 他方、「行為の合理化」とは「何故そのようにするのかを理由づけによって説明する行為者の能力」⁽⁷⁰⁾を説明する概念であり、行為者は、この能力を活用して、行為の理由を自他に向けて表明することができる。そして行為者はこの理由に準拠して、自らの行為について継続的な再帰的モニタリングを行うのである。行為の再帰的モニタリングと行為の合理化は、行為者の知識能力によって支えられている。行為の再帰的モニタリングは行為者の実践的な知識能力に支えられ、行為の合理化は行為者の論述的な知識能力に支えられている。実践的な知識能力と論述的な知識能力は、相互に深く浸透し合っている。ただし Giddens の行為主体性概念において、より中心的な位置を占めているのは、論述意識のレベルにおいて蓄積される論述的な知識能力ではなく、実践意識のレベルにおいて蓄積される、実践的な知識能力である。この点について Giddens は次のように述べる。「相互行為を生産し、再生産するさいにアクターによって参照される知識のストックは、同時に、アクターが自らの目的、理由、動機を説明するような場合に提供される資源でもある。しかし社会的アクターの知識能力が論述意識という形で活用されるのは、その認知活動の一部分についてだけに過ぎない。アクターの潜在能力というレベルでは、社会システムの構造特性は、実践意識のなかに埋め込まれている。」⁽⁷¹⁾

以上の考察をもとに、Giddens の行為主体性概念をより正確に表現すれば「行為主体性とは、世界内の事象の継続する過程に対して、身体を持った存在が、実践意識、あるいは論述意識を用いて因果的に介入していく流れ」ということになろう。実践意識を用いた因果的介入が行為の再帰的なモニタリングであり、論述意識を用いた因果的介入が行為の合理化である。実践意識と論述意識は相互に浸透し合っているが、行為主体性において、より中心的な位置を占めるのは、実践意識である。なお、「行為の動機づけ」に関する Giddens の論考については、深層心理学でいう無意識に相当する部分に大きく左右されるという、示唆に富む内容を含んではいるが、論旨に深刻な混乱が残されていることを確認し、検討を打ち切った。

第3章の後半においては、以上のような Giddens による行為主体性の概念規定を根底から批判した Archer の義論と、これとは逆に、Giddens の概念規定を擁護するべく、さらにこれを補強し、強化しようとした Stones の議論を取り上げ、両者を対比しながら検討した。

Archer による Giddens の行為主体性概念への批判に関しては、以下の二点を確認した。第一点は行為主体性の存在論への批判である。Archer は、Giddens の構造化理論が、第二章でも指摘したように、「二重性」という概念に依拠して「中心的な融合」central conflation という図式をとることから、行為主体性の概念に関しても、存在論的に誤った議論に陥っている、と批判する。構造化理論では、人間の行為主体性には、独立の存在論的身分が与えられていない。行為主体性はプラクシスによって中心的に融合され、そこに消去的に還元されてしまっている。Archer によれば、構造化理論において、プラクシスは中心的融合の中心点に位置してすべてを吸い込むブラックホールのような存在である。プラクシスは行為（実践）でもあり、構造（慣習・慣行）でもある。行為としてのプラクシスとは、構造を知識能力によって統御する knowledgeable mastery⁽⁷²⁾ 実践である。他方、構造としてのプラクシスは、慣習・慣行に関する記憶痕跡 memory trace として行為者の頭脳の中に存在している⁽⁷³⁾。行為主体性はプラクシスによって消去的に還元され、独立した存在論的身分を与えられていない。第二点は行為主体性の社会理論への批判である。Archer は Giddens の行為主体性の議論について、存在論として誤っているがゆえに、社会理論としても破綻していることを批判している。Archer によれば、「行為としてのプラクシスとは、構造を知識能力によって統御する knowledgeable mastery 実践である」という、上記の存在論的な命題からは、行為者についての過剰に能動的な見立て over-active view of agent が導かれ、逆に、「構造としてのプラクシスは、慣習・慣行に関する記憶痕跡 memory trace として行為者の頭脳の中に存在している」という、上記のもう一つの存在論的な命題からは、行為者についての過剰に社会的な見立て over-social view of person が導かれる、という。前者は Giddens が乗り越えようとした主意主義的に逆戻りする道であり、後者は、今度は、Giddens が乗り越えようとした物象化に逆戻りする道である。だから Archer によれば、Giddens の行為主体性に関する議論は、存在論的にも社会理論的にも破綻している、ということになる。

Stones (2005) では、Archer による構造化論の行為主体性概念に対する、以上のような批判に対抗して、これを擁護する議論を展開している。その基本的な方針は、Archer のような存在論的な議論に踏み込むことなく、社会理論としての構造化理論の有効性を救い出していくことだった。Stones は「行為者の知識能力が構造の再生産をもたらす」、「行為者の知識能力には限界があるため、行為者は認知できない条件に影響されながら行為し、その行為は行為者の意図しない帰結をもたらす」という Giddens の行為に関する社会理論の命題に着目し、ここに汎用的性向と連接特定力という概念を導入することで、さらに詳細な考察を行った。Stones によれば、行為者の主体的作用を生み出す基盤となる知識能力である汎用的性向と連接特定力という内部構造は、外部構造との関係で対極的な性質を帯びている。汎用的性向は内閉的で非自省的・非自覚的な性質を帯び、行為者を所与の外部構造のなかに慢性的に埋め込んでいく要素である。それとは反対に、連接特定力は外向きで自省的・自覚的な性質を帯び、行為者に対して外部構造を能動的に統御できる可能性を付与する要素である。行為者にとって自らの汎用的性向について批判的な省察を行い、その限界を克服していくことには大きな困難を伴うが、連接特定力については批判的な省察による修正を通じてその内容を拡大し、増強していくことが可能である。Stones は行為主体の内部構造として再生産される知識能力を汎用的性向と連接特定力という二つの階層からなる複合モデルとして描く。この複合モデルを採用することで、知識能力を汎用的性向だけに

よって説明し尽くそうとして「行為者についての過剰に社会的な見立て」に後退していく道を選けることができる。それだけではない。この複層モデルを採用することで、知識能力を連接特定力だけによって捉えた場合に陥るであろう「行為者についての過剰に能動的な見立て」に後退していく道を回避することもできる。Stones は行為者の主体性に関して、還元論的な説明に陥ることのない社会理論を Giddens よりも一層明晰なかたちで提出しようとしたのだった。とはいえ、構造化理論を社会理論として救出しようとした Stones の試みが、批判的实在論の側からなされている存在論的な曖昧さへの批判を回避して行われている、という点も銘記しておく必要があるだろう。Stones によって救出されたかに見える「強い構造化理論」は、依然として存在論的に曖昧な部分を残しているのである。

＜第4章＞

第4章においては、構造化理論における構造 structure という概念と、それをめぐる論争について検討した。まずはじめに、Giddens の構造に関する概念規定について検討した。構造の定義は、三つのレベルで重層的に行われている。第一には、「構造は規則と資源である」という直示的な定義が行われている。第二には、「構造は社会システムが生産され、再生産される中で循環的に含まれる契機 moment としてのみ、時空の中に存在している。構造は「仮想的な」存在 'virtual' existence しか持たない」という存在論的な定義が行われている。第三には、「構造は社会システムを構成する実践の媒体でもあり、実践の帰結でもある。構造の二重性という概念は、常にどこでも知識能力のある社会的アクターが状況に応じて達成する社会的相互行為の生産を、時間と空間を拡張して行われる社会システムの再生産に繋げる」という因果論的な定義が行われている。

第4章では次に、Sewell と Stones による、構造化理論への批判について、検討を行った。Sewell は構造化理論を独自の視点から読み替え、構造化理論における「社会を知識の観点から研究する志向性」を拡充することを試みている。Sewell は、構造化理論を構築主義的な社会理論によって再解釈することで、その利点を救い出すことが可能であることを示した。これに対して Porpora が試みたことは、实在論的な社会理論の視点から、構造化理論を根底から批判することだった。Porpora は、構造を関係として構想し、そうした構造が、行為に対する先行条件として、行為者を強く拘束するものであることを示すことで、構造化理論へのアンチテーゼを提供しようとした。

第4章では、最後に、Elder-Vass による、創発主義的な存在論に基づく構造の概念規定を検討した。Elder-Vass は、構造概念をめぐってこれまで行われてきた学説上の論争について、①関係としての構造、②制度としての構造、③身体化された構造、という三つの構想が鼎立状態にある、と総括している。この認識は、ここまで筆者が本章において行ってきた作業で得られた結論とも、一致している。このような学説の鼎立状態に決着をつけるために、Elder-Vass は、④全体としての構造という新たな構想を示している。Elder-Vass は、この第四の構想によって、これまで行われてきた論争のなかで見出されてきた構造に関する主要な論点をすべて取り込み、この論争に決着をつけることが可能であることを主張した。また、この四つの構想に関する構想が、構造化理論の主要争点であった「知識」についてどのような立場を取っているのかについても、筆者なりの視点から整理することを試みた。その結果をマトリクス図で示し、この図

がこれから知識社会学の研究を進めていくうえでの道標となりうることを示唆して、本論文全体の考察を終了させた。

すでに10年も前に連載を開始しながら、停滞のあげく、長い中断を経て再開された本論文は、連載開始当初に濃厚だった構造化理論を擁護する姿勢を大幅に後退させ、むしろ實在論的な存在論・社会理論の優位性を強調するに至る、という展開を辿ることになった。現状のまま通読して感じられるだろう、論調の揺れについては、改稿による修正が不可欠であろう。またいくつかのテクニカルターム、とりわけ分析哲学系の用語の運用に関しては、さらに細心の注意を払って改善を図ることが必要だろう。しかし、当初設定した研究課題そのものについては、一貫した姿勢で追求し続けることができた。社会理論をめぐる論争をレビューするさいに追求されるべき目標は、特定の論者を論争の勝者として、一方的に擁護したり、あるいは逆に、特定の論者を異端として、論争のアリーナから追放してしまうことではない。本論文が設定した目標は、構造化理論に端を発する論争を丹念に追跡するなかで、今後の理論研究、実証研究にとって有益な導きとなる何らかの「論理の地図」を作り出すことだった。構造化理論をめぐる主要な論争点を洗い出す作業を通じて、知識や知識能力を主導概念として社会学の研究を進めていく道標となりうるような、一貫性のある論理地図に到達することができた。本論文の研究目標は達成された。

※この論文は科学研究費補助金（課題番号18K01993）による研究成果の一部である。

注

- (1) Porpora (1997).
- (2) Sewell (1992).
- (3) Sewell (1992) をもとに筆者作成。
- (4) 千田 (2001) 4-7 頁。
- (5) 本論文4.4.4の表2を見よ。
- (6) 同上。
- (7) 同上。
- (8) 構造が社会の成員に対してもたらず、可能性付与的な効果だけではなく、抑圧的な効果にも、着目しているという意味での両義性を指している。
- (9) Marx (1852) 邦訳書7頁。
- (10) Giddens による引用は Giddens (1984) p.xxi.
- (11) Giddens (1979) p.69.
- (12) Archer (1995) pp.93-134.
- (13) Porpora (2015) p.116.
- (14) Porpora (2015) p.116. 括弧内は筆者による補足。
- (15) Porpora は構造を関係として構想することが「ナイーブ」であるという Giddens の主張 (Giddens (1984) p.16) に注目する (Porpora (2015) p.110)。「ナイーブ」というのはどのような意味だろう。そのことを説明するために、Porpora は「構造を何らかの種類の社会関係の様式とする概念規定は、主体と社会的客体との間の二項対立図式 dualism と密接に結びついている。この規定によれば、構造は、独立に構成された主体の自由なイニシアティヴに対する、制約の源泉として、人間の行為に外在するものとして現れることになっ

てしまう」という、同じ箇所での Giddens の主張を引用している。

- (16) Archer (1995), (1996), (2003).
- (17) Porpora (2015) p.118.
- (18) Porpora (2015) p.119.
- (19) CR とは批判的实在論 Critical Realism の略称。
- (20) Porpora (2015) p.119.
- (21) Porpora (2015) p.119.
- (22) 本論文4.3.4項を見よ。
- (23) Elder-Vass は4.5.1項で主役として取り上げた Porpora と同じく、批判的实在論と呼ばれる社会理論を代表する論客の一人である。だが、両者の社会構築主義に対する距離の取り方は、大きく異なっている。Porpora が、社会構築主義を強く否定する「強い实在論」の立場であるのに対し、Elder-Vass は、穏健な社会構築主義と共存可能な「穏健な实在論」を志向する立場を取っている。(Elder-Vass (2012) chapter 1)
- (24) Elder-Vass (2008). なお、英国社会学雑誌の発行者は、かつて Giddens が学長を務めた LSE である。
- (25) Elder-Vass (2008) をもとに筆者作成。
- (26) Elder-Vass (2008) pp.284-285.
- (27) Elder-Vass (2008) p.285.
- (28) Elder-Vass (2008) p.286. 日本語では、日常言語において「構造」が「全体」という意味で用いられることはないが、『スーパー大辞林』の「構造」の項には「さまざまな要素が相互に関連し合って作り上げている総体」という記述がある。
- (29) 批判的实在論による存在論が指定する構造要素には、さらに、全体としての構造が時間の経過のなかで維持され、再生産される局面である形態安定 morphostatis と、それが新しく作られたり、変容する局面である形態創成 morphogenesis が含まれている。この二つの構造要素については、議論が煩雑になることを避けるために、本論文では言及しない。
- (30) Elder-Vass (2010) p.66.
- (31) Elder-Vass (2010) pp.66-67.
- (32) Elder-Vass (2010) p.67. 括弧内は筆者による追記。
- (33) Elder-Vass (2008) p.292.
- (34) Elder-Vass (2008) p.292.
- (35) Elder-Vass (2008) p.293.
- (36) Elder-Vass (2008) p.293.
- (37) Elder-Vass (2012).
- (38) Searle (1995). chapter 1, pp.1-29.
- (39) Elder-Vass (2012) p.57.
- (40) Elder-Vass (1995) p.60.
- (41) Searle (1995) の第 1 章「社会的現実の建築材料」は、ナマの事実 brute fact と制度的事実 institutional fact を区別し、後者（貨幣、婚姻など）が社会においてどのように構築されるのかを主題としている。
- (42) 貨幣制度を、構造要素の用語系を用いて完全に説明するには、貨幣の創発特性が帰属する「全体」としての存在者は何か、という問いにも答えなければならない。この難問について、Elder-Vass は必ずしも明確な答えを提示していない。しかし、筆者は、貨幣についても規範的な現象と見做すことで、答えを見い出して

いくことが可能ではないか、と考えている。つまり、貨幣に関する規範を承認・履行する人々からなる「貨幣に関する規範サークル」という全体を想定する、という方向である。もちろん「貨幣に関する規範サークル」といっても、様々なものがあるに違いない。例えば、国際金融システムのような複雑な制度に関して、規範サークルという全体を措定する、という作業は困難を極めるかも知れない。だが、例えば地域通貨のような、ローカルな制度についてであれば、この制度に関わる規範サークル全体の範囲を具体的に突き止めていくことは、それほど困難な作業ではないだろう。

- (43) Elder-Vass (2008) p.293.
- (44) Elder-Vass (2012) pp.22-23.
- (45) Elder-Vass (2012) p.23.
- (46) Elder-Vass (2010) chapter 7.
- (47) parts の訳語。文字通り「部品」と訳してたほうが分かりやすいが、一般的存在論としては、部分という訳語で統一した方が望ましいだろう。
- (48) Elder-Vass (2012) p.18.
- (49) ただし、人間と物質の双方を部分として構成される「ハイブリッドな構造物」についての研究も重要であることは間違いがない。室内楽のクインテットのような存在者を考えるうえでは、奏者だけではなく、楽器もその部分として含めて考察するのが望ましいだろう。Elder-Vass (2017) は、このようなハイブリッドな存在者の構造を主題とする研究を行っている。
- (50) いずれも Elder-Vass (2008) p.294.
- (51) Elder-Vass (2008) p.293.
- (52) 出典は Stones (2001) p.194.
- (53) 出典は Bourdieu (1990) p.53.
- (54) 出典は Bourdieu (1990) p.50.
- (55) Elder-Vass (2008) pp.293-294.
- (56) Elder-Vass (2008) p.294. 括弧内は筆者による追記。
- (57) Elder-Vass (2010) p.138.
- (58) Giddens (1984) p.24.
- (59) Elder-Vass (2010) p.141.
- (60) Elder-Vass (2008) p.295.
- (61) Elder-Vass (2008) p.295.
- (62) Elder-Vass (2008) p.297.
- (63) Giddens (1993) pp.128-129.
- (64) Giddens (1979) p.5.
- (65) Mouzelis (1991) pp.30-31.
- (66) Stones (2005) pp.57-58.
- (67) Giddens (1993) p.81.
- (68) Giddens (1993) p.81.
- (69) Giddens (1984) p.5. 括弧内は筆者による追記。
- (70) Giddens (1979) p.57.
- (71) Giddens (1995) p.27.

(72) Archer (1995) p.94.

(73) Archer (1995) p.108.

引用文献

- Archer, M. (1995) *Realist Social Theory: the Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press.
- _____ (1996) *Culture and Agency: The Place of Culture in Social Theory*, Cambridge University Press.
- _____ (2003) *Structure, Agency and Internal Conversation*, Cambridge University Press.
- _____ (2012) *The Reflexive Imperative in Late Modernity*, Cambridge University Press.
- Berger, P. L. and T. Luckmann (1967) *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Anchor Books.
- Bloor, D. (1991) *Knowledge and Social Imagery, 2nd ed.*, The University of Chicago Press.
- Bourdieu, P. (1990) *The Logic of Practice*, Polity Press.
- Elder-Vass, D. (2008) "Integrating Institutional, Relational and Embodied Structure: an Emergentist Perspective," *The British Journal of Sociology*, 59 (2).
- _____ (2010) *The Causal Power of Social Structure: Emergence, Structure and Agency*, Cambridge University Press.
- _____ (2012) *The Reality of Social Construction*, Cambridge University Press.
- _____ (2017) "Material Parts in Social Structures," *Journal of Social Ontology*, 3 (1).
- Giddens, A. (1979) *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*, University of California Press.
- _____ (1984) *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration* Polity Press.
- _____ (1993) *New Rules of Sociological Method, 2nd ed.*, Polity Press.
- _____ (1995) *A Contemporary Critique of Historical Materialism, 2nd. ed.*, Macmillan Press.
- Lopez, J. J. and J. Scott (2000) *Social Structure*, Open University Press.
- Marx, K. (1852) *Der 18. Brumaire des Louis Bonaparte*. 植村邦彦 訳 『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』太田出版 1996年
- Mouzelis, N. (1991) *Back to Sociological Theory: The Construction of Social Order*, Macmillan Press.
- Porpora, D. V. (1987) *The Concept of Social Structure*, Greenwood Press.
- _____ (1989) "Four Concepts of Social Structure" , *Journal for the Theory of Social Behaviour* 19. (引用は当論文を所収した Archer, M. et al. eds., *Critical Realism; Essential Readings*, Routledge, 1998より行った。)
- _____ (2015) *Reconstructing Sociology: The Critical Realist Approach*, Cambridge University Press.
- Searle, J. (1995) *The Construction of Social Reality*, Penguin Books.
- 千田有紀 (2001) 「構築主義の系譜学」 上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房
- Sewell, W. H. (1992) "A Theory of Structure: Duality, Agency and Transformation", *American Journal of Sociology*, 98 (1).
- Stones, R. (2001) "Refuting the Realism-Structuration Divide", *European Journal of Social Theory*, 4.
- _____ (2005) *Structuration Theory*, Palgrave Macmillan.

(一橋大学大学院社会学研究科特任教授)